
ソニック・ザ・ヘッジホッグ「エメラルドの暴走」

こた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソニック・ザ・ヘッジホッグ「エメラルドの暴走」

【Zコード】

Z2548Y

【作者名】

こた

【あらすじ】

いつものようにソニックとエッグマンは戦っていた。
ソニックが七つの力オスエメラルドを使いスーパーソニックへ変身し、誰もが勝負はついたと確信した…

しかし、異変は起こつた。

突然暴れ出し、ソニック達を攻撃する力オスエメラルド。
一体力オスエメラルドになにが起こつたのか?

ソニック達の新たな冒険が始まる！

キャラクター紹介（前書き）

ソーテクを「存知ない、もしくはあまり詳しくない方もいらっしゃる」と思つので、一応キャラ紹介をします。

キャラクター紹介

【ソニック・ザ・ヘッジホッグ】（主人公）

種別 ハリネズミ

年 15歳

特徴

- ・全身が青い
- ・大きな白い手袋
- ・赤いスニーカー
- ・大きなトゲ（数本）

特技

- ・超音速で走ること
 - ・スーパー化
- （スーパー化とは、七つ集めると奇跡を起こすと言われている「力オスエメラルド」のパワーを取り込んでパワーアップすること。通常時を遥かに超える能力を有し飛行も可能だが、極端にエネルギーを消費するため短時間しかスーパー化を維持することが出来ない。）

自由気ままが大好きで曲がったことが大嫌い。短気なところがあるが、困っている人は放つておけない優しさを持つ。約束は守り、絶対に裏切らない。ただし、じつとしていることや水は苦手という欠点もある。

【マイルス・パワーアー】（通称「テイルス」）

種別 キツネ

年 8歳

特徴

- ・全身が黄色い
- ・大きな白い手袋
- ・大きな2本の尻尾

特技

- ・尻尾を回転させて飛ぶ
- ・機械いじり

心優しい子ギツネ。過去に尻尾が一本あることでいじめられていたが、ソニックの走る姿を見て勇気づけられ、その後を追いかけることになった。機械いじりが大好きで、その能力を活かしソニックをサポートする。

【ナックルズ・ザ・エキドウナ】

種別 ハリモグラ

年 16歳

特徴

- ・全身が赤い
- ・手が大きく、手の甲に一本のトゲが付いている

特技

- ・穴掘り
- ・壁登り
- ・滑空

ソニックの喧嘩友達で良きライバル。「マスター エメラルド」という不思議な力を持つ大きなエメラルドの守護者。生真面目であるため、よくエッグマンに騙されることも。トレジャー ハンターでもある。彼の拳は強力で、大きな岩も軽々と破壊できる。

【Dr・エッグマン】

種別 人間

年 不明

特徴

- ・体型が卵の様に丸い
- ・目に小さく丸いサングラス（と思わしきもの）をかけている

自分勝手でわがままな「自称」悪の天才科学者。IQ300と高い知力を持つが、人の迷惑を考えない。何度も計画をソニックに阻止されている。

【シャドウ・ザ・ヘッジホッグ】

種別 ハリネズミ

年 不明

特徴

- ・全身が黒い（赤い箇所もある）
- ・見た目がソニックと瓜二つ
- ・走る時は地を蹴つて走るというより、靴から出る空気でスケートの様に滑走する様に走る。

特技

- ・音速で走る
- ・カオスコントロール
- ・カオスブラスト
- ・カオススピア
- ・スーパー化

「Dr・エッグマン」の祖父にあたる世紀の天才科学者「プロフェッサー・ジエラルド」によって生み出された究極生命体。「カオス

「エメラルド」を使い、時空を歪ませることが出来る『カオスコントロール』の力を与えられている。

【シルバー・ザ・ヘッジホッグ】

種別 ハリネズミ

年 14歳

特技

- ・超能力を使って物を動かし、それを投げて攻撃できる
- ・ESPによる飛行
- ・スーパー化

荒廃した未来を変えるべく、未来からやって来たハリネズミ。様々なサイコキネシスを使う。

【ダーク・ザ・ヘッジホッグ】（オリキヤラ）

種族 ハリネズミ

性別 男

年 ?

今回の事件の主犯。カオスエメラルドを操る能力を持つ。シャドウの行方を追っているが、目的は不明。

【ハイク】（本名は不明）（オリキヤラ）

種族 ハリネズミ

性別 男

年 ?

朱色の体を持つハリネズミ。見た目はソニックと少し似ているが、頭に大きな毛が立っている。（本人は少し気にしている。）記憶を失っているが、正義感が強く熱い。銃使いであり、その腕前はかなりのもの。ただし、ムキになると危険な銃弾を使うが本人はそれを危険と感じない。また、なかなかの俊足。

【エミー・ローズ】

種族 ハリネズミ

性別 女

年 14歳

「自称」ソニックのガールフレンド。今回もソニックを追いかけているが……。

キャラクター紹介（後書き）

参考 ソニックチャンネル（公式HP）

プロローグ（前書き）

はじめまして こたと申します。
初投稿です。

登場キャラ

ソニック、テイルス、ナックルズ、ユミー、エッグマン、シャドウ、
シルバー、ハイク（オリキャラ）、ダーク（オリキャラ）

こんな感じです。よろしくお願いします？

プロローグ

見渡す限り広い草原が広がっている

草原の真ん中で「彼」は昼寝をしていた。

太陽が少し眩しい。
だが、そよ風が心地良い。

近くで小河が流れている。
水の流れる音が心を静かにする。

チチチ

小鳥のさえずりが聞こえる。

なんて……平和なんだろう……

穏やかな表情を浮かべ、「彼」は目をつぶりながらそう思っていた。

「彼」は朱色の体をしており、背中には数本の大きなトゲがある。また一本の大きなベルトを身に付けており、片方は腰に、またもう片方は無造作に肩にかけていた。

大きな草が生えていると、「彼」は少しうつむいていた…

その時

「ん……？」

空で起きている小さな異変に気づき、「彼」はゆっくりと目を開ける。

「……！」

「彼」は驚いて体を起こした。

少し目を疑った。

「彼」の寝ている場所だけ日陰になっている。

しかし空に雲は一つもなく、周囲にものやの要因となるような物はなかった。

「な……なんだこれ……」

「彼」は小さく呟いた。

その時空に気配を感じ、「彼」は空を見上げる。

「嘘つ……シャドウ・ザ・ヘッジホッグじゃない……」

どこからか不気味な声が聞こえた。

「誰だつー?」

「彼」は空を見上げたまま腰のベルトに装着していた拳銃一二を取り出した。

「……まあこーい、教えてやるつー……」

シコカカカカカカカウウウウウウウ……ー!

声のする方に禍々しこ黒い煙のよつたものが集まつた。

鳥達はこの存在に気がついたのか、皆飛び去つていった。

その煙はだんだん一匹のハリネズミとなつた。

そのハリネズミはゆっくりと地上に降り立つ。

サクッ

草を踏む音が少し大きく聞こえた。

「俺の名は……ダーク。ダーク・ザ・ヘッジホッグだ。この世の唯一にして究極の存在……」

静かな物腰でこそあるが、海の底のように冷たい群青の瞳と漆黒で背中に悪魔のような翼の生えた体を持つハリネズミ　ダークは不敵にそう言い放った。

「……あんたが俺に何の用だが知らないが……究極の存在だつて？　ハッ！　笑わせるな。悪いが俺にはあんたが究極の存在だなんてちつとも思えないね。」

チャキッ！

「彼」はダークに二丁の銃を構えながら言った。

「……貴様に用は無い……だが、折角だ。俺が究極の存在である証拠を見せてやるつ。」

ザツザツザツザ
...

ダークは不気味な微笑みを顔に浮かべながら、「彼」に向かつてゆつくり歩き始めた。

「来るな！」

ダンシーダンシー！

「彼」はダークに銃を撃つ。

レシシーレシシ---

「なつ……………！」

弾は当たったが、ダークは表情一つ変えずに近づいてくる。

「これならどうだつ！」

ジャキッ！

「彼」は一旦銃を下のホルダーに戻し、背中から先程の銃よりも数段威力の高いグレネードランチャーを取り出した。

「行つけえ　！！」

ドンッ！ドンッ！…ドンッ！…！

「彼」はダークに向かつてグレネードを三発撃つた。

ドガ　ン！！！

グレネードはダークに命中し爆発した。

その衝撃で周りの草が燃えているのが分かる。
しかし、ダークの姿は噴煙で見えない。

シユ～～～ッ…

煙が大分引いてきた。

「彼」は自らの目を疑つた。

彼の周囲こそ惨状と化していたものの、ダーク本人は無傷だった。

ダッ!!

「彼」は走り出した。

「俺の足の速さをなめるなよ……お前なんかに追いつけるものか！」

「彼」は走りながら振り返った。

「……っな！？」

さつきまでダークが居た場所にダークは居なかつた。

「臆つただろう……この世の絶対にして究極の存在だ……と。」

「……？」

「彼」は正面に向き直った。

そこには片手を「彼」に向けているダークが居た。

「やつ、やばい……」

このスピードだと止まれない……

ダークの手に紫色の光が集まる。

「……とどめだ。」

「ンシ……

ダークの手から黒い閃光が迸った。

ズガアアッ

「うわああああああつ……」

「彼」はビームに直撃し、空中に投げ出された。

ドザツ……

「彼」は地面に叩きつけられ、意識を失った。

「……フン。」

蔑むように嘲笑うとダークは姿を消した。

「……うう……」

太陽が西へ沈むうとしているとき、「彼」はようやく田を覚ました。

「彼」はようよると立ち上がった。

「ガツ！？」

全身についた傷が痛み、「彼」は倒れかけた。

「……………？」

SONIC VS EGGMAN

ドガーン!!

ヒコ~~~~~ドーン!!!!

何発もの爆音が響く。

「」は自分勝手でわがままな「自称」悪の天才科学者、Dr・エッグマンが作った基地の中だった。

基地の中は毎回であるにも関わらず、少し薄暗く感じられた。基地内の司令塔のような大きな建物が不気味にそびえ立っている。

名前の通り卵のような体をしているエッグマンは、毎度のように自分が作った大きなロボットに乗り、「彼」を追いかけていた。

「待てえええ!!」

エッグマンはロボットを操縦しながら叫ぶ。

「COME ON!!」

「彼」ソニックは走りながら叫んだ。

音速で走り回る青いハリネズミ ソニック・ザ・ヘッジホッグ。大きな白い手袋と赤いスニーカーが特徴的な彼は、何度もエッグマ

ンの手から世界を救つてきた世界最速のハリネズミである。

「くう～！～忌忌しいハリネズミめ！」

エッグマンがミサイルを撃ちながらソーックを追いかけていた。

レバーナー...アーヴィング

ミサイルがソニツクに向つて飛ぶが一発も当たらず、全て壁や床に当たる。

「へへっ！遅い攻撃だなエッグマン！」
ソニックは走りながら叫んだ。

「だまれーーーぐうーーー当たれーーー！」

ソーックはロボットの攻撃をスイスイ避けていく。

その時

ドカーン！

「むうつ！？」

何かがロボットを攻撃した。

「ソニックーーー！」

ブーーーーン！

その正体は愛機・トルネードに乗ったテイルスの放ったミサイルだつた。

彼は一本の尻尾を持つた黄色の子ギンネで、ソニックの良きパートナーである。

「ソニック！援護するよーーー！」

テイルスは操縦席から笑顔を見せながら言った。

「THANKSーーー！」

ビッ！

ソニックはテイルスに親指を立てた。

「悪戯しそうのが一匹になりおったワイーー！うなつたらフルパワーじ

「！」

ガチャツ、ガチャツ！

ギュイ
ン！！

ロボットは変形しさらに大きくなつた。

「… せひ うへて なまけ者…」

「その余裕もそこまでじゃ！覚悟しろい！！」

コオオツ！！

ロボットのスピードが上がった。

「俺に追いつけるかな？」

バビュンツ！！

ソーックもさらにスピードを上げた。

「爺爺……」

ロボットの全身からミサイルやマシンガンなどが一斉に撃たれた。

「 ルル～ 〇〇〇～！」

ソニックは全て避けながら言った。

「 ハルスー～ ハッグマン～！」

「 デンシ～ デンシ～！」

ドガ ン～！

テイルスはエッグマンのロボットの一発、大きなミサイルを撃ち込んだ。

それらは見事に命中した。

「 のわつ～？」

エッグマンはひるんだ。

「 ハアツ～！」

「…………」

その隙にソニックはロボットにホールミングアタックをした。

「きかぬわっ！…！」

ギュワア　ン！　

バキイツ！　

ロボットは勢いよく回転し、ソニックを弾き飛ばした。

「うわあっ！　

ババッ！

ソニックは空中で体制を整えて着地した。

エッグマンはテイルスの方を見た。

「貴様の相手は」「こつじやー・ポチッとなー…！」

エッグマンは何かのスイッチを押した。

... -- $T_1 T_2 T_3 T_4 T_5 T_6 T_7$

エッグマンのロボットから膨大な数のミサイルや追尾弾が飛び出した。

「そんなものでやられるもんかー！」

グオオオ
ン！！

トルネードは大きく旋回した。

ついで僕達がエッグマンと戦つのは何回目だろ？

テイルスはトルネードを操縦しながらそう思っていた。

エッグマンは再びソニックを追いかけだした。

「COME ON---COME ON---」

ダツ――！

ソニックは逃げながら叫んだ。

「ハツ――！」

ションツ――！

ソニックの姿が消えた。

「なにいつ――ソニックめ、ゼニへ消えた――??.」

エッグマンは辺りを見回した。

「いやあ――!」

頭上から声がした。

エッグマンが上を向いた。

ギュイイイイイ
ン！！！

そり立回転しながら落トしてくるソーラーク。

ドガ
ン！！

「のわあつ！？」

ソニックはロボットの頭上に回転しながらアタックした。

「まだまだじやあ～～！～！」

ギュウ！

ロボットは再び回転を始めた。

「ぐあつ！」

ソニックは再び弾き飛ばされた。

ババツ！

ドガーン！！

ソニックは空中で体制を整え、壁を蹴りもつ一度ロボットにアタッ
クした。

「あらぬと聞けぬじやが……」

ギュウ
ワ
！
！

エッグマンはロボットを再び回転させ、ソーラーを弾き飛ばした。

「…」おさひこ

ソーックは空高く弾き飛ばされた。

エッグマンは高笑いをした。

「 あ て、 ど う か な あ ？ 」

ソニックは空中で不敵に笑いながら言った。

「 ふんっ、 貴様は 「 E - Z 」 を倒すどいろか傷一つすらつけず
んぞ！ 」

エッグマンは憎たらしく言った。

その時

キララッ…

ソニックの周りに赤、青、黄、緑、白、水色、紫の光が現れた。

「 さ て、 こ れ は な ん で し ょ う ？ 」

ソニックはにやけながら言った。

「 ん な つ …… き、 貴様、 ま さ か つ ！ ！ ？ 」

エッグマンは叫んだ。

そう……ソーックの周りに現れたのは

力オスエメラルド。

ソニックは目を閉じた。

グオオオオオオオツ！！！！

カオスエメラルドがソニックの周りを勢いよく回り始めた。

ソニックの体が徐々に金色になつていいく。

「やつた！スーパーソニックだー！」

ティルスはミサイルを破壊しながら嬉々としてそう叫んだ。

シユオオオオオオオオオツ!!

「ハアアッ！！！！！」

ボワッ！！

ソニックはスーパーソニックになつた。

「タケシタケシ」

エッグマンは焦りだした。

SILVER VS DARK

一方その頃……ソニック達が戦っている場所から遙か離れた場所にある水の公国「ソレアナ」に一匹のハリネズミが居た。

「……ああ　！今日も平和だな　！」

ソレアナの街から少し離れた浜辺で1人ねっころがりながら大きく伸びをした銀色のハリネズミ　シルバー・ザ・ヘッジホッグは一人呟いた。

雪のような銀白の毛皮に身を包み、ブーツを思わせる少し丈の高い靴が彼の気高さを彷彿とさせる。

ザザ　ン…！

潮の良い匂いがする。

海の潮風が、彼の白い胸毛を揺らす。

その時

「…………？」

彼は異変を感じ、静かに目を開いた。

しかし周りに誰もおらず、目の前には半透明の海、空にはカモメが飛んでいるくらいだった。

「…………氣のせいか。」

そう呟き、再び目を閉じた時

「…………違つ、ここつもシャドウじやない。」

突然聞こえた不気味な声にシルバーは体を起こし、周りを見回した。

「誰だ！？」

シルバーは周りを見回しながら叫んだ。

「…？」

シルバーは上空に気配を感じ、空を見上げる。

「な、何だあれ！？」

気配のあるところに禍々しい黒い煙のようなものが集まつた。

そしてそのまま一匹の漆黒のハリネズミになつた。

「なつ……お前は……メフィレス！？」

シルバーは身構えながら言った。

確かにその姿はメフィレスに似ていた。

かつて荒廃した未来で自分を騙し、ソニックを殺させようとして全ての歴史の抹殺を企んだあの男

「メフィレス・ザ・ダーク」に。

奴はイブリースと融合し、再び「過去・現在・未来」同時に存在する超次元生命体「ソラリスト」となつた。

だが、奴は俺とソニック、そしてシャドウと共に倒したはず。
なのに何故……？

フワツ……

漆黒のハリネズミは無言で海の上に舞い降りた。

「……メフィレスとは誰の事だ？俺はダーク。ダーク・ザ・ヘッジ
ホッグだ。」

そのハリネズミ　　ダークは静かに言い放った。

「……この世の絶対にして究極の存在だ。」

「……それで、その究極の存在が俺に何の用だ？」

シルバーはダークを睨みつけながら言った。

「貴様に用は無いが……折角だ。俺の力を見せてやろう。」

シユオオオオオオオオ！！

ダークの周りに黒い霧が吹き出した。

「！？」

ジャキ

霧はそのまま数本の大きく鋭い槍になつた。

「……消えう。」

ビヨンシー

槍が一斉にシルバーに襲いかかつた。

「無駄だ！！」

シルバーは両手を前に突き出した。

ピタッ！！

槍は全てシルバーの周りで青白く光り、静止した。

「……ほう。」

ダークは微かに驚いた表情を見せた。

「俺の超能力をなめるなよ！お返しするぜーー！」

ビュンッ！！

グオオオオオツ！！

シルバーがダークに向かつて腕を振ると槍は全てダークに向かつて飛んでいった。

ガキインッ！-キインッ！-

しかし、槍は全てダークの目の前で弾かれてしまった。

「なつ、何！？」

シルバーは驚き田を見開いた。

「これでどうだ！」

バツ！

シルバーは大きく跳躍した。

「へりえつーー！」

バリバリツーー！

シルバーはダークの近くに着地し、周りにサイコキネシスを放った。

バリショーンツーー！

それは命中したものの、ダークは表情一つ変えずに浮かんでいる。

「……なかなかやるようだが、そんな程度で俺を倒す事は不可能。」

「なつーー？」

シルバーは自分の目を疑つた。

「もういい……消えろ。」

静かに言い放つと、ダークは片手をシルバーに向けた。

ダークの掌に黒い光が集まってきた。
どれほど強い威力を發揮するのかは、その光の大きさを見れば一目瞭然だつた。

その余派がダークの足元の海水を大きく揺らしている。

「アーティスト」

まづい、やられる
！

シルバーは防御体制に入り、目を閉じた。

その時

ギュウウウウウウウウウウウウウウ
ン

ダークの強大で禍々しいオーラが徐々に薄れていくのを感じた。

？」

シルバーは徐に目を開けた。

」

ダークは無言で海の彼方を見つめている。

「……あつちに大きな力が……この力はカオスエメラルドか……？」

「カオスエメラルド……だと？」

シルバーは思わずそう尋ねた。

ダークはシルバーの方に向き返した。

「……今日は見逃してやる。次会つた時は容赦無く消す。」

ギュウウウウン！

そう告げるヒダークはゆっくつ上昇した。

「ハアツ！！」

ドシュツ！！

ダークは遙か彼方に飛び去つていった。

「…………なんだつたんだあいつは…………？」

シルバーは呆然としたまま、そう呟いた。

「カオスエメラルド…………何か嫌な予感がするが、このまま奴を放つておくわけにはいかない。」

ボワツツ……！

シルバーの体が青く光つた。

ふわあつ……

そしてそのままシルバーの体がゆっくりと宙に浮かんだ。

「ハアツー！」

シュンツー！

そして、そのままダークの消えた方へと猛スピードで飛び去つていった。

SILVER VS DARK（後書き）

この話は「新ソニ」が終わってから約一週間程経つた頃という設定で読んで頂けたら嬉しいです。

原作では「ソラ里斯」を倒した後はシルバーはもう未来に帰っていますが、今作ではシルバーはまだ未来に帰っていない設定です。理由はご想像にお任せします（笑）

STARTING OVER

戦いの場は再びヒックマンの基地に戻る……。

「どうしたヒックマンへやつらまでの威勢はどう行った?」

スーパーソニックは宙に浮かびながら余裕たっぷりと言った。

「ぐ、ぐぬ……」

ヒックマンは悔しそうな表情を見せてくる。

カオスエメラルドの力を使いパワーアップしたスーパーソニックは、エッグマンのロボットを圧倒的な力で攻撃し続けた。連續攻撃を受け、ロボットは既にボロボロであった。

「こまま一気に終わらせてやる……。」

ソニックは叫んだ。

「く……く……く……。」
「またしてもワシの計画を邪魔しあつて

エッグマンは最早なす術がなかつた。

？？？？？？？？？？

その頃、ソニック達の居る場所より遙か上空に一匹のハリネズミが居た。

「……シャドウに似ているがシャドウじゃない。奴は一体何者だ……？まあいい、どうやら奴はカオスエメラルドの力でパワーアップしたようだな。俺の力でちょっと遊んでやるか。」

スッ

ハリネズミ　ダークは静かに片手をソニックに向かた。

そんなダークの姿に気づきもしないソニックは、エッグマンに最後に人差し指を立てた。

「覚悟しな、エッグマンー！..！」

ドンッ！..

ソニックは一気に力を開放した。

「くつ、 もはやここまでか……」

エッグマンは目を閉じた。

しかし、そのまま何ら変化が起ることとはなかった。

「.....？」

ヒッグマンは静かに目を開けた。

シコウカウカウカウカウ

スーパーソニックの力が少しずつ弱まっていくのが分かる。

「ぐつ……ぐべぐつ……！……！」

スーパーソニックは苦しげな面持ちだった。

「……ニック、どうしたの？」

テイルスがトルネードの操縦席から尋ねかけた。

「ぐつ……体が……動かない……！」

スーパーソニックは苦しげに呻いた。

「えつ！？」

テイルスは尋ね返した。

「イイツ！

それを聞いたエッグマンの表情に笑みが浮かぶ。

「ホ　　ホホ　　！　情けないのうソーザク！攻撃チャンスじや
ー！」

ウイイイイイン！

ロボットの腕がゆっくりと上がっている。

「やめろ　　！　　エッグマン！　　！」

ドガ　　ン！　　！

テイルスがミサイルを放ち、見事ロボットに命中する。

「ああ　　ああ　　っ！　　！」

ガシャ　　ン！　　！

ロボットは体制を崩した。

「くう～！邪魔な子ギツネめ～～～～！」

エッグマンは、ギリギリと歯軋りしながら言った。

「大丈夫！？ソニツ
ク？」

ソニックを振り返ったテイルスは驚いて声が出せなかつた。

ソニックは頭を抱えている。

ビカ
ン！！

スーパー・ソニックの叫びと共にソニックの体から七つの力オスエメラルドが抜け、本来の青いハリネズミの姿に戻った。

「なぬつ！？」

ソニックと対峙して立てるエッグマンが皿の皿を疑った。

ドナッ！

ソニックは地に落ちその場に倒れた。

「ハア　　ハア　　」

ソニックは両手両足を地面に付けたまま荒呼吸をしている。

「オオオオッ

そして上空には異様な光を放つカオスエメラルドが浮かんでいた。

「何がどうなつておるのじや?—」

エッグマンがそう言った瞬間

ギュイイ
ン！

ズガアツ！！

カオスエメラルドは肉眼ではとらえられないほどの速さで凝結し、エッグマンのロボットを貫いた。

「やあ、どうしたのね……」

涙ながらに嘆くエッグマンのもとで

ドガ
ン！！！

ロボットは爆発した。

エッグマンは遙か彼方に弾き飛ばされた。

TARGET

「んなつー...?」

ようやく呼吸が整ったソニックは驚いていた。

なんだつたんだ……？

そう思いながら分裂し七つに戻り、まとまらない動きで浮揚する力
オスエメラルドに近寄った。

その瞬間

ビカアツー！！

カオスエメラルドが眩い光を放った。

「つな！？」

ソニックは思わず足を止めた。

「ソニック、危ない！…」

ヒュンッ！

テイルスが叫んだ瞬間、カオスエメラルドの一つが猛スピードで突つ込んだ。

「のわつ！？」

バッ！

ソニックはギリギリでそれをかわした。

「くつ、SAFE！」

バッバッ！！

ソニックは大きくバックステップをし、カオスエメラルドから離れた。

「ど、どうなつてんだ？」

「オオオオオオッ

異様な光を放ち続けるカオスエメラルドに視線を投げかけながらソニックは呟いた。

ヒュッ！

そして再び一つがソニックに襲いかかった。

「くつ！」

ソニックはまたもギリギリでかわした。

「くそ、何でスピードだ！」

バッ！

再び大きくバックステップをしながらソニックは苦々しげにそう呟いた。

「ソニック、乗つて――！」

トルネードがソニックに近づいてきた。

その時

ビカアアツ――！

カオスエメラルドは再び強い閃光を放つた。

「ま、マズい――テイルス！来るな――！」

ソニックは叫んだが
最早手遅れだった。

バキイツ！！

カオスエメラルドが再び肉眼で見えないほどの速さで凝結し
トルネードを貫いた。

「なつ！？」「

ヒュルルル

ソーラーの叫びと共にトルネードは回転しながら墜落し、

ドガ
ン！！！

そのまま爆発した。

「テ、テイルス
！！！！！」

ソーックは叫んだ。

墜落した所から大きな黒煙がもくもくとあがっているのが分かる。

ドガアツ！！

「ぐあっ！！」

トルネードの墜落に気を取られている隙に、カオスエメラルドの一つがソニックの腹に猛スピードで突っ込んだ。

「ぐつー！」

ソニックは腹を押さえながら片膝をついた。あまりの激痛に一瞬頭が真っ白になった。

「く……！」のままじややられる

ソニックがそう思った瞬間

ビュンッ！！

「のわあつー?」

黒い影が突然現れ、ソニックの腕を掴んだ。

そのまま猛スピードでどんどん力オスマーレードから遠ざかって行く。

「だ……誰だ?」

空いている方の手で痛みの取れない腹を押さえながら、ソニックは自分の腕を掴んでいる者を見た。

ソニックの腕を掴みながら音速で走る……いや滑走する者の正体は
……

「お前は シャドウー?」

彼に瓜二つの黒いハリネズミ シャドウ・ザ・ヘッジホッグだった。

「…………」

表情一つをも変えることなく、シャドウは無言で滑走し続けた。

バツー！

シャドウは大きく跳躍し、エッグマンの基地から脱出した。

ストッ

軽やかに着地し、そのまま再び滑走はじめた。

その地を滑る音は、まるで氷の上を滑るアイススケートの様な音だった。

基地から大分離れた所でシャドウは徐々にスピードを落とし、

ドサツ！

「おわっ！」

シャドウは乱暴にソニックの腕を離した。

ソーラーはバランスを崩し地に倒れた。

「…………」

デュロジー

相変わらず無口のままシャードウは猛スピードで壁に走り去り、あつとこつ間に姿が見えなくなった。

「シャードウ……」

ソーラーはシャードウの消えていった方向を見ながら走った。

？？？？？？？？？？？？

「…………ハ　　ツハツハツハ――――」

「…………ハ　　ツハツハツハ――――」

上空からソニック達を見下ろしていたダークは突如高笑いをした。

「どひどひ見つけたぞ……シャドウ・ザ・ヘッジホッグ！－！－！」

「ギュンッ－！」

ダークは田にもどまらぬ速さでシャドウを上空から追跡した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2548y/>

ソニック・ザ・ヘッジホッグ「エメラルドの暴走」

2011年11月20日05時09分発行